

親切のバトン

埼玉県 与野本町小学校

5年 山川 明華

「おこまりの方はどうぞ自由にお持ちください。」

近所の家のげん関先に置かれたカサ立てには、色とりどりのカサが立てられており、この紙がはられていた。初めて見たときは、正直いって不思議な気持ちになった。

必要もないのに持っていく人はいないのだろうか、と心配になって、その家の前を通るたびに、心配してカサ立てを見るのがくせになってしまった。でも、そんなことはよけいな心配だったようだ。いつ見ても、カサ立てが空っぽになることはなかった。

「どうぞのいす」という、私が小さいときに大好きだった絵本がある。うさぎさんが役に立ちたくて作ったいすを通して、いろんなできごとが起きるのだ。「からっぽにしては、あとの人におきのどく」というフレーズが続いて、次の人のために何かを残していく話なのだが、それは、まさに「カサ」と同じ気持ちなのだろう。

近所のカサは、「雨にぬれてしまっははおきのどく」というその家の人のやさしさの気持ちから始まっているのだが、そのあとに続く「また次の人のために」という気持ちがないと、次につながらない。

「親切とは、相手の身になって、その人のために何かをすること」と辞書に書かれていた。カサは、直せつ見える相手に行く親切ではないが、見えない相手、雨にふられてこまっているだれかのことを思っで行う親切のバトンだ。

私も親切をしたい気持ちはあるけれど、はずかしさがあり、声をかける勇気が出ないことも多く、後かいしてしまうこともある。でも、親切は決してはずかしいものではなく、相手の身になってみれば、できることのはずだ。自分のもらった親切をだれかに返す、という気持ちをわすれないでいれば、親切が世の中をつなげていくことになるだろう。

親切のバトンをと切れさせないこと。特別なことではなく、バトンをつないでいく気持ちになって、これから私も、しっかりとだれかから受け取り、親切をつないでいきたい。